

## ウパグプタのマーラ調伏物語 —Avadānakalpalatā と Lokapaññatti の伝承を中心に— \*

山崎一穂

### 1 はじめに

フランスの碩学 Eugène BURNOUF による *Divyāvādāna* (Divy) 所収のアショーカ王伝説の翻訳研究以降、アショーカ王伝説の源流と展開を文献資料に基づいて跡付けることを試みた研究は PRZYLUKSI [1923] を以てその先蹤とする。PRZYLUKSI [1923: xi-xv] はアショーカ王伝説を伝える漢訳経典として『阿育王伝』(『王伝』)、『阿育王経』(『王経』)の二本が存在し、Divy の他に漢訳『雑阿含経』中にアショーカ王伝説の断片が見られることを指摘した。PRZYLUKSI [1923: xiii, 54-58] はこれらの所伝を検討し、Divy 所収の断片の章と『王経』の章が密接に対応する一方、『王伝』は他伝本の何れにも対応しない部分を含むことを明らかにし、四伝本の対応表を作成し、『王伝』を仏訳した。また PRZYLUKSI [1923: 44-53] はこれら一連のアショーカ王伝説が共通して伝える長老の系譜をパーリ上座部、大衆部のそれと比較検討し、これらのアショーカ王伝説がマトウラーの説一切有部の手で編纂されたと推定した。

LÜDERS [1926] は PRZYLUKSI [1923] の研究成果を踏まえ、童受 (Kumāralāta、二世紀後半) の *Kalpanāmaṇḍitikā* (KalpM) の復元テキストに対する長い序文の中でアショーカ王伝説の材源と成立に関する論考を加えた。LÜDERS [1926: 71-132] は Divy、『王伝』、『王経』、『雑阿含経』所収のアショーカ王伝説に挿入された KalpM の引用箇所を綿密に検討し、アショーカ王伝説が本来ウパグプタ伝説群とアショーカ伝説群という別個の伝説群から成り、この両者が三世紀頃合わさってアショーカ王伝説が成立したと推定した。LÜDERS [1926: 127-132] はこの祖形伝本が四世紀頃、新たな一伝本として存在しており、安法欽により 306 年に『王伝』として漢訳され、祖形伝本自体は 512 年に僧伽婆羅によって祖形をほぼ忠実に再現した形で『王経』に漢訳され、Divy の編者は僧伽婆羅の漢訳と同一祖形に遡る伝本を基に、現行 Divy に見られるアショーカ王伝説を著したと結論付けた。

PRZYLUKSI [1923] と LÜDERS [1926] の研究は今日の研究成果に照らして修正せねばならない点もあるが、アショーカ王伝説研究の出発点となるものである。しかし両研究が発表された当時

\*本論を著すに当たり、九州大学の岡野潔先生よりケンブリッジ大学所蔵の Av-klp の写本二本の複写を、片岡啓先生より NGMPP 収録写本の複写を頂いた。茲に記して御礼申し上げます。

はチベット大蔵経所収の単立のアヴァダーナ文献及びネパールの後期アヴァダーナ文献に関する研究が十分に進んでいなかった為<sup>1</sup>、それらの資料に存するアショーカ王伝説の成立史の問題は後に持ち越されることになった。1950年代に入ってこれらに関する本格的な研究も現れたが<sup>2</sup>、時期的な理由もあって相互の参照が行われていない憾みがある。従ってこれらの新出資料とそれに関する研究成果を総合した研究が今日の学界水準では要求されるようになった。その試みはまず STRONG [1983, 1992] によって行われた。STRONG [1983, 1992] の研究はアショーカ王伝説の研究に人類学的視点を取り入れた点、アショーカ王伝説とインド文化史との関わりを深く分析した点で画期的であった。しかし STRONG [1983, 1992] の研究は一次資料の正確な読解と緻密な文献学的検討に基づいたアショーカ王伝説の材源と展開の考察に主眼が向けられているとは言い難い<sup>3</sup>。本論では上記の問題点を踏まえ、アショーカ王伝説の一部をなすウパグプタ長老伝に含まれるマーラ調伏譚に関する諸伝本のうち、11世紀カシミールの詩人クシェーメンドラの説話集 *Bodhisattvāvadānakalpalatā* (Av-klp)、11-12世紀成立の宇宙論文献 *Lokapaññatti* (Loka-p) という二つの文献の所伝に焦点を当て、その材源について検討する。

## 2 マーラ調伏譚の諸伝本の類型化

まず、クシェーメンドラ本、Loka-p 所伝本との比較考察に用いる資料の類型化から始めよう。ウパグプタ長老伝を伝える諸伝本のうち、マーラ調伏譚を含むものは以下の伝本である。

- *Divyāvadāna* 第26章 *Pāṃsupradānāvadāna*<sup>4</sup>
- 『阿育王伝』巻第五「商那和修因縁<sup>5</sup>」西晋・安法欽訳 306年

<sup>1</sup>尤も全く言及されなかったわけではない。PRZYLUKI [1923: xv] はアショーカ王伝説の後代の梵文伝本として *Aśokāvadānamālā* の存在を指摘し、冒頭の第1-6章が韻文で増補されたアショーカ王伝説であり、その所伝は古い伝本に見られる伝説群の再現であって、内容に関しての価値は殆どないが、その構成の点では無視できないものであると述べている。

<sup>2</sup>例えば BONGARD-LEVIN & VOLKOVA [1963, 1965]、METTE [1985] が挙げられよう。前者では *Aśokāvadānamālā* 第五章 *Kuṇāla* の原典の校訂と並行伝本との比較検討が行われている。後者はチベット大蔵経テンギュル書簡部、律疏部所収の二つのアショーカ王伝説、即ち *Mya ngan med pa'i sgo nas klu btul ba'i le'u* (Tōhoku Cat #4197)、*Ku na la'i rtogs pa brjod pa* (Tōhoku Cat #4145) の内容梗概を紹介し、並行伝本との比較検討を行ったものである。METTE [1985] は *Mya ngan med pa'i sgo nas klu btul ba'i le'u* の並行話が『阿育王伝』巻第七「阿育王現報因縁第四」、Av-klp 第73章 *Nāgadūtapreṣaṇa*、及び *Tāranātha* の『仏教史』中に存在することを指摘し、これら三伝本との顕著な相違点を挙げた。METTE [1985] によると、『阿育王伝』の所伝は *Mya ngan med pa'i sgo nas klu btul ba'i le'u* と冒頭部がいくらか異なっており、クシェーメンドラ本の内容は更に本来の意図から離れているという。また METTE [1985] は *Tāranātha* の所伝は *Mya ngan med pa'i sgo nas klu btul ba'i le'u* と基本的に対応するものの固有の特徴を備えており、この材源の問題については *Mya ngan med pa'i sgo nas klu btul ba'i le'u* と直接的な親子関係にはない『天尊説阿育王譬喩経』(T#2044)、『雜譬喩経』(T#205) の所伝を検討する必要性があることを示唆した。

<sup>3</sup>同書が欧州の研究者から完膚なきまでに批判されたことは前回の拙論で述べた通りであるが(拙論「クシェーメンドラ本「クナーラ・アヴァダーナ」の源泉資料について」『比較論理学研究』8 (2010): 66, fn. 17)、MCDERMOTT [1985] の如き肯定的な書評もある。同書はテキストの文献学的問題を論ずることに意義を認めるか否かで書評者の評価が分かれるものであることは念頭に置かねばならない。しかしいずれの立場をとるにせよ、この書評者が STRONG [1983] が行った *Divy* 所収のアショーカ王伝説の英訳を“*The translation is admirable for its clarity, reliability, and readability.*”(p. 180、下線筆者) と評したのには賛同できない。

<sup>4</sup>Cambridge: The University Press, 1886, 356.6-364.15.

<sup>5</sup>T#2042, 118b25-120b1.

- 『阿育王経』卷第八 「仏弟子五人伝授法蔵因縁下 優波笈多因縁<sup>6</sup>」梁・僧伽婆羅訳 512年
- 『大莊嚴論経』(Kumāralāta's *Kalpanāmaṇḍitikā*)卷第九<sup>7</sup> 後秦・鳩摩羅什訳 五世紀
- 『賢愚経』卷第十三 「優波毬提品第六十<sup>8</sup>」元魏・慧覺等訳 445年
- 『注維摩詰経』卷第十<sup>9</sup> 後秦・釋僧肇撰 五世紀
- Tāranātha's *Dam pa'i chos rin po che 'phags pa'i yul du ji ltar dar ba'i tshul gsal bar bston pa, dgos 'dod kun 'byung* (Tāranātha) 第四章<sup>10</sup> 1608年

伝本は以上の通りである。これらが伝える物語要素を類型化し、図表に示すと以下の如くとなる。

	Divv	『王伝』	『王経』	『莊』	『賢』	『維』	Taranātha
(a) ウバグプタの出家・阿羅漢果獲得	○	○	○	×	○	×	× <sup>11</sup>
(b) 真珠・黄金の降雨	○	○	○	×	×	×	△ <sup>12</sup>
(c) 金銭・花環の降雨	△ <sup>13</sup>	△ <sup>14</sup>	△ <sup>15</sup>	△ <sup>16</sup>	○	△ <sup>17</sup>	×
(d) 六牙象化作	×	×	×	×	○	×	×
(e) マーラ、天女に変装する	○	○	○	×	○	×	○
(f) マーラ、犬、蛇、人間の屍を結び付けられる	○	○	○	△ <sup>18</sup>	△ <sup>19</sup>	△ <sup>20</sup>	△ <sup>21</sup>
(g) マーラ、天界の神々に助けを求める	○	○	○	○	○	○	×
(h) マーラの降伏	○	○	○	○	○	○	○
(i) マーラ、仏陀の姿を化作する	○	○	○	○	○	○	○
(j) マーラ、邪心を捨てマトゥラーの住人を集める	○	○	○	×	×	×	×
(k) マトゥラーの住人、阿羅漢果を獲得する	○	○	○	○	○	×	○

<sup>6</sup>T#2043, 159a6–161a18.

<sup>7</sup>T#201, 307b29–309b26. LÜDERS [1926: 166.40–171.36] に一部対応。漢訳の諸伝承では馬鳴作 *Sūtrālamkāra* の漢訳とされるが、童受作 KalpM の漢訳である。KalpM の作者問題については HAHN [1982] を参照されたい。

LÜDERS [1926: 26–32] は KalpM を馬鳴の著作とする漢訳伝承が生じた理由として、馬鳴の著作に *Sūtrālamkāra* という書が実在し、それが漢訳されないまま散逸し、類似した表題を持つ KalpM の別名 *Kalpanālamkārtikā*、すなわち『莊嚴論』と混同されたことによると推定した。LÜDERS [1926] がその推定の状況証拠に挙げるのは次の二点である。

- (1) ベルリンの写本集成に Kuci 語で書かれた *Udānavarga* 註の断片写本が三本あり、それは章毎に異なる韻律を用いて著されている。
- (2) キジルの廢墟で発見された 13 葉からなる木皮写本に同様の註釈が存し、これが特定のストラに対するカーヴィア体の韻文註であり、写本には章名が付されていないものの、内容と形式から判断して十分に *Sūtrālamkāra* という名称に恥じない。

この推定が妥当であることは HANISCH [2007] によって改めて支持されることとなった。HANISCH [2007] はチベット大蔵経テンギルに存するアールヤシューラ (四世紀頃) の *Jātakamālā* (AJM) に対する註釈 *sKyes pa'i rabs kyi rgya cher bshad pa* 中に *gZhan la phan pa'i dbyangs* (\*Parahitaghōṣa) の *mDo sde rgyan* (\**Sūtrālamkāra*) から三詩節の引用があることを明らかにした。Parahitaghōṣa は *Aśvaghōṣa* が *A-sva-ghoṣa* と筆写されていたことに起因する誤りであり、*mDo sde rgyan* は馬鳴に帰せられる作品である。*mDo sde rgyan* からの引用は AJM 17.22 及び 17.27 に対する注釈中に見られ、HANISCH [2007] はこれら三詩節を KalpM の梵文断片及び漢訳『大莊嚴論経』に求めた結果、当該詩節が見られないことを指摘している。またこれら三詩節はそれぞれ 13 音節四脚、九音節四脚、11 音節四脚の韻律からなり、LÜDERS [1926] の提示した韻文註の特徴に近く、内容もよく適合するという。

<sup>8</sup>T#202, 443a9–443c1.

<sup>9</sup>T#1775, 419a22–b18.

<sup>10</sup>St-Petersburg: Commissionäre Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften, 1868, 11.3–13.8.

Divy、『王伝』、『王経』の三伝本は散文部分が韻文、或いは韻文が散文で表現されている点、漢訳者による省略や簡略化が行われている等の微細な点を除いて物語の筋はほぼ一致し、(g)–(i)までのDivyのテキストと『大莊嚴論経』の梵本KalpMのテキストは逐語的に一致する<sup>22</sup>。従って三者はLÜDERS [1926] が指摘するように同系統に属し、冒頭部を除く大部分をKalpMの所伝から借用して成立したものと見る事が出来よう。(f)はDivy、『王伝』、『王経』が犬、蛇、人間の三種の屍を伝え、『賢愚経』、『注維摩詰経』、ターラナータの所伝が犬の屍のみを伝えるのに対し、『大莊嚴論経』のみは「三種」(T307c4–5)と述べ、屍が何か具体的に明示していない。しかしこれについてはLÜDERS [1926: 91–93] が鳩摩羅什による改変の可能性を指摘している<sup>23</sup>。(g)はターラナータの所伝を除く伝本に見られ、言及される神々の名に違いが見られるが、何れの伝本も「最後に梵天に助けを求めた」とする点では共通しており、残る神々の名は口承段階或いは漢訳段階で省略されたものと見て大過ないと思われる。

<sup>11</sup>当該章では述べられず、直前の章で出家し、阿羅漢果を獲得したことが述べられる。

<sup>12</sup>説法第一日目に果実、第二日目に衣、第三日目に銀、第四日目に黄金、第五日目に七宝の雨を降らせたと述べられる。

<sup>13</sup>花環のみあり。

<sup>14</sup>同上。

<sup>15</sup>同上。

<sup>16</sup>同上。

<sup>17</sup>同上。

<sup>18</sup>本論脚註 23 を参照されたい。

<sup>19</sup>犬のみあり。

<sup>20</sup>同上。

<sup>21</sup>同上。

<sup>22</sup>Divyと『大莊嚴論経』に存する並行箇所について、これが『大莊嚴論経』の基になった原典、すなわちKalpMがDivyに基づいて書かれたことではなく、DivyがKalpMに基づいて著されたことの所産であることを証明したのはHUBER [1904] である。HUBER [1904: 709–713] はその論拠として、Divyに見られるSūra長老に関する言及(Divy 361.3、『王伝』T119c18、『王経』T160b11)が『大莊嚴論経』(T301a11–302a25)に伝えられるSūra長老の物語に基づいていること、『大莊嚴論経』のマーラ調伏譚が、マーラがウパグプタの卓越性を認めたという内容で終わっているのに対し、Divyでは物語が一万人の民衆が改宗する所まで続き、その末尾に置かれる、ウパグプタ長老の権威を強調する偈(Divy 363.23–26、『王経』T161a11–14)はそれとほぼ同内容の偈を『大莊嚴論経』(T277a22–25)に見出すことが出来ることを挙げた。

<sup>23</sup>LÜDERS [1926: 91–93] はKalpMの借用部分に属さない冒頭部分の(f)でDivyの所伝が「ウパグプタが犬、蛇、人間の三種の屍をマーラに結び付けた」と述べているにも拘らず、KalpMの借用部分である(g)–(i)の冒頭の偈文で犬の屍のみに言及している奇妙な点に注目し、ウパグプタ伝説の二系統を推定した。LÜDERS [1926] の主張する所は次の通りである。すなわち、ウパグプタ伝説には以下の二系統が存在した。

系統 (1) ウパグプタがマーラに犬、蛇、人間の三種の屍を結び付けたと伝えるもの

系統 (2) ウパグプタがマーラに犬の屍のみを結び付けたと伝えるもの

系統 (1) に属するのはDivy、『王伝』、『王経』の三伝本の祖形が伝えるウパグプタ伝説である。一方KalpMの伝承は系統 (2) に属する。系統 (1) に属するウパグプタ王伝の改変者は後に系統 (2) に属するKalpMの一部を借用して本文に挿入した。その際、元のウパグプタ伝説の内容とKalpMの借用箇所の内容の間に矛盾を生んでしまった。しかしKalpMの借用箇所は韻文である為に矛盾を解消出来ず放置された。『王伝』、『王経』の漢訳者はこの矛盾に気づき、借用部分冒頭にある韻文の翻訳に当たりśva-「犬」を訳さず単にそれぞれ「死屍」(『王伝』T119a8)、「死尸」(『王経』T159b19)と訳すことでつじつまを合わせた。『大莊嚴論経』に「三種死屍」とあるのはKalpMの漢訳者鳩摩羅什による改変である。何故なら童受が最初に三種の屍について述べていたなら、その後の詩節で殊更に犬の屍だけについて述べるとは考えられないからである、というのである。このLÜDERS [1926: 91–93] の所説は、ウパグプタ伝説の改変者が何故韻文部分ではなく、直前の散文を改変することで矛盾を解決しようとしなかったのかという点で疑問が残る。しかし『賢愚経』やターラナータ、後述するLoka-pの所伝を検討するにLÜDERS [1926] の所説を論駁することは難しいであろう。従って以下ではLÜDERS [1926] の説を前提として論を進める。

従ってターラナータの所伝を除くマーラ調伏譚の基本形は「マーラの布教妨害」、「屍を結び付けられるマーラ」、「梵天に助けを求めるマーラ」、「マーラの降伏」、「仏陀の姿の化作」という五つの骨組みから構成されており、LÜDERS [1926: 91–93] が推定する要素 (f) 改変説を受け入れるならば、Divy 系統と非 Divy 系統という二系統の伝承に分けることが可能であろう。以上を念頭に置いてクシェーメンドラ本、Loka-p の所伝と上記諸伝本の関係を考察してみよう。

### 3 クシェーメンドラ本マーラ調伏譚

#### 3.1 先行研究

クシェーメンドラ本マーラ調伏譚は Av-klp のアショーカ王伝説を形成する第 70–74 章のうち、第 72 章 Upagupta に見られる<sup>24</sup>。この Av-klp 所収のアショーカ王伝説の材源の問題について PRZYLUSKI [1923: 98–105] は次のように推定している。すなわち前半の第 70 章 Mādhyantika から第 72 章 Upagupta までの伝承と後半の第 73 章 Nāgadūtapreṣaṇa と第 74 章 Pṛthivīpradāna の伝承はそれぞれコーサンビー、マトウラーを經由して伝承された西方系伝承とチャンパーを經由して伝えられた東方系伝承に属する。東方伝承は近隣の国々の民間伝承に由来する要素を付加され、『声聞蔵』(Śrāvakaṭīka) と呼ばれる現地の部派の經典に組み込まれて、カシミールに伝承された。この東西二伝承はクシェーメンドラによって混合、詩形改稿され Av-klp に見られる形となった、というのである。しかし PRZYLUSKI [1923: 101] はクシェーメンドラが東西の二伝承を複合したという理由について「仏教が衰退の只中にある時期に、北西インドで書かれた為である」として、自説を裏付ける有力な根拠を示してはいない。

#### 3.2 クシェーメンドラ本の構成

では以下に、クシェーメンドラ本に見られるマーラ調伏譚の材源がどこに求められるかについて検討してみよう。クシェーメンドラ本マーラ調伏譚は第 72 章の第 41–72 詩節に相当する。クシェーメンドラ本は第 55、第 65 詩節に śārdūlavikrīḍita、第 72 詩節に mālinī が用いられている他は全て anuṣṭubh 調の短い韻文で語られている。その内容は次の通りである。

シャーナヴァーシン比丘のもとで出家したウパグプタは阿羅漢となり、マトウラーの民衆に仏法を説く (vv. 40–41)。マーラはこれを知り、説法を妨害すべく真珠の雨を降らせ、自らも踊り子の姿をとり、天女と共に舞を舞ったので、民衆の心は仏法から離れる (vv. 42–45)。ウパグプタはマーラを呼び寄せ、頭に蛇の屍を、両耳に犬と人間の屍を結び付ける。マーラはインドラ神、ヴィシュヌ神、梵天に助けを求めるが失敗し、ウパグプタのもとに戻る (vv. 46–50)。ウパグプタ長老は許しを乞うマーラに、比丘を攪乱しないことを約束させ、仏陀の色身 (rūpakāya) を示すことを条件に屍を除いてやる (vv. 51–61)。マーラは仏陀の色身を術現し、マトウラーの住人を呼び出し、ウパグプタの説法を聴聞させる。一万八千人のマトウラーの住人はウパグプタの教えのもとで阿羅漢となる (vv. 62–71)。帰結辞 (v. 72)。

#### 3.3 クシェーメンドラ本の類型化

以上を 2 に挙げた諸伝本の内容と対応させてみると、クシェーメンドラ本は要素 (c) を除いて、Divy 系統の三伝本に対応箇所を持つことが知られる。特に (f) と (j) を忠実に再現していることは注目に値する。

<sup>24</sup>Calcutta: Baptist Mission Press, 1918, 564–583.

[Av-klp 72.48]

uktveti mālavyājena babandhāsya śavatrāyam |  
mastake sarpakuṇapaṃ karṇe ca śvamaṇṣayayoḥ || 72.48 ||

かく述べて、花環と見せ掛けて三つの死骸、つまり、蛇の死骸をこの者の頭に、犬と人間の〔死骸をこの者の〕両耳に結び付けた。

[Av-klp 72.70]

tenaivātha samāhūtā vinītena hitaiṣiṇā |  
upaguptāntikaṃ pauraḥ saddharmaṃ śrotum āyayuh || 72.70 ||

そしてまさにその者(マーラ)は教化されたので、他者を利益しようと欲し、都城の民を呼び出すと、〔彼等は〕正しい法を聴聞しようとして、ウバグプタの近くにやって来た。

このことが示唆するように、クシェーメンドラ本は Divy 系統の伝本に基づいて書かれた可能性が高いことが知られる。しかし他方では、クシェーメンドラ本は Divy 系統の三伝本に伝えられる内容の欠落を顕著に示すこともまた事実である。それを挙げるならば以下の通りである。

- (1) Divy 系統の三伝本では説法は数日間に及び、マーラは第二日目に黄金の雨、第三日目に黄金と真珠を降らせ、更にウバグプタの上に花環を落としたことが述べられるが、この一連の記述がクシェーメンドラ本にはない。
- (2) ウバグプタが屍の花環を取り付ける際発する偈文が存在しない。
- (3) また神々がマーラに語り掛ける偈文も存在しない。
- (4) 仏弟子と声聞の化作がなされない。
- (5) ウバグプタが仏陀の姿を見て歓喜して発する語が存在しない。

(1)–(3)(5) についてはクシェーメンドラが作為的に省略したものと見てほぼ間違いのないであろう。(4) についてはクシェーメンドラ本は次のように述べる。

[Av-klp 72.65]

dirghadyānanimīlalanayugaṃ niḥsaṃbhramabhrūlatam  
nāsāvaṃśaniṣaktakāntakanakacchattropamānālikam<sup>25</sup> |  
nirbhūṣyatakarnaṇapāśalitam vyālabibāhudrumam  
bauddham rūpam avekṣya nirvṛtir abhūn niścetanānām api || 72.65 ||

長い間禅定に入ってその両眼を閉じ、蔓草のようなその眉毛は微動だにせず、その鼻背に美しい黄金色を備え、その額は日傘のようであり<sup>26</sup>、飾りを付けていないにも拘わらず、その長くて美しい耳の故に愛らしく、樹のようなその腕が垂れ下がった仏陀の姿を見て、感覚の働きのない者達にまで歓喜が生じた。

この記述は「是時魔王。化身作仏。軀体丈六。紫磨金色。三十二相。八十種好。光明赫奕。踰倍日月」(T443b20–22) とする『賢愚経』の所伝に類似する。従ってクシェーメンドラ、或いは

<sup>25</sup>upamānālikam ] AEDZ (Ed.), Tib. has *mtshungs pa'i mtshan ma can* (\*-upamānāliṅgam).

<sup>26</sup>ネパール系の写本と梵文音写は当該個所の末尾を等しく、-cchattropamānālikam 「その額は日傘のようであり」とするが、Tib. は *gdugs dang mtshungs pa'i mtshan ma can* であり、還梵すると \*-cchatopamānāliṅgam 「その印は日傘のようであり」となる。LC Suppl. は当該個所を典拠として *mtshan ma can* の訳語に *ālika* を充てるが、上記を考慮するならばこの訳語は適切ではあるまい。

クシェーメンドラが材源とした伝本の編者が『賢愚経』の元となった口承ないしは伝本に伝えられる伝承を基にしていた可能性が考えられる。しかしクシェーメンドラ或いはクシェーメンドラが材源とした伝本の編者が Divy 系統の三伝本に見られる荘厳な場面の写実的描写を捨て、敢えて簡潔に過ぎる『賢愚経』に見られるような記述を利用する十分な理由は想定し難い。またクシェーメンドラ本に見られる仏陀の描写は同じく給孤独長者の娘スマーガダーが仏陀の美を語る Av-klp 第 93 章 Sumāgadhā 第 25 詩節と頻繁に字句が一致することに我々は注意せねばならない。

[Av-klp 93.25]

dhyānādhīnaḥ stīmitanayanaḥ pūrṇalāvaṇyasindhur  
nāsāvamaṣaṃ vipulasaralaṃ setubhūtaṃ dadhānaḥ |  
bhūṣāśūnyaprasṛtarucimatkaṇṇapāśābhirāmaḥ  
kāntyavāsau kim api viduṣāṃ śāntim antas tanoti || 93.25 ||

かの御方は溢れる程の美を湛える海であり、禪定に入れば、その眼は動くことがなく、堤のような大きくて真っ直ぐな鼻背を備えており、飾りも付けていないのに、流れ出る光線を宿した美しい耳の故に魅力的であり、美だけで以て賢者たちの間に、何とも言い表し難い、寂靜なるものをお広めになります。

これらの状況証拠を考慮すると、当該個所はクシェーメンドラによる創作の可能性が濃厚であり、クシェーメンドラ或いはクシェーメンドラが材源とした伝本の編者が『賢愚経』に伝えられる記述を取り入れていた可能性は排除され得よう。従って以上を総合すると次のように結論付けられよう。

- 三種の屍に言及する点、マトウラーの住人を呼び集めるマーラに関する記述を含む点から判断して、クシェーメンドラがマーラ調伏譚を著すに当たり用いた材源は Divy 系統の伝本である。またこの伝本は KalpM による改変を受けた後の新しい Divy 系統の伝本に属する。
- クシェーメンドラが材源としたこの伝本の編者或いはクシェーメンドラ自身が『賢愚経』を始めとする Divy 系統以外の伝本に伝えられる伝承を部分的に取り入れていた可能性は低い。

## 4 Loka-p 所収のマーラ調伏譚

### 4.1 先行研究

Loka-p は 11-12 世紀頃ビルマでパーリ語に翻訳、編纂された宇宙論文献である<sup>27</sup>。Loka-p には状態の悪い三本の写本が残るのみであり<sup>28</sup>、DUROISELLE [1904] によって本論に扱うウパグプタ物語の部分的な研究がなされた他は、長らくその全容は明らかにされなかった。しかし Mus [1939: 124-133] はこの Loka-p が漢訳『仏説立世阿毘曇論』(真諦訳、T#1644) の内容とほぼ一致することを指摘した。この Mus [1939] の研究を基に DENIS [1977] は Loka-p のテキストを『仏説立世阿毘曇論』のそれと綿密に比較検討しながら、Loka-p のテキスト全体を復元することに成功した。

Loka-p は宇宙論を主題とする論書であり、宇宙論を伝える個所自体は正量部に属する<sup>29</sup>。しかし DENIS [1976: 100-101] が指摘するように、六趣を説明する第 14 章 Samsāragativibhāga は『仏説立世阿毘曇論』に対応箇所が見られない。またこの箇所のうち、阿修羅と人間と神々を説明する個所にはそれぞれ全く内容を異にする転輪王に関する記述、シヴァ神に関する伝説、マーラの物語、ウパグプタのヴァダナーの四つが挿入されている。

さて Loka-p 中のウパグプタ伝説の源泉資料について、その最初の校訂テキストと仏訳を発表した DUROISELLE [1904: 415] は、Loka-p の所伝には北伝仏教特有の「法身 (dharmakāya)」と「色身 (rūpakāya)」の二種に関する記述が見られるものの、Divy やターラナータの所伝には見られない「仏塔を供養しようとするアショーカを守るために、ウパグプタ長老がマーラと対決する」という記述が存することを指摘した。DUROISELLE [1904] はこの事実に基づいて、Loka-p の編者がウパグプタ伝説を著すに当たり依拠していた源泉資料は Divy のものでも、ターラナータのものでもなく、既に散逸してしまった材源であろうと推定した。

<sup>27</sup>DENIS [1977] は Loka-p が梵語で書かれていた材源からビルマにおいて 11-12 世紀頃パーリ語に翻訳され、編纂されたものであると推定した。その根拠として DENIS [1977: I, ii-ix] は次の点を挙げる。

- (1) Loka-p はビルマとタイ北部以外では知られていない。
- (2) Loka-p のパーリ語には至る所に梵語の影響が見られ、東南アジアで同時代に著された *Meleyyadevatheravatthum*, *Jinakālamālinī*, *Cāmadēvivamsa*, *Paññāsajātaka* に使用されているパーリ語の特徴に近い。
- (3) ビルマでは民間のナーガ崇拝が広く流布しており、それは Loka-p のウパグプタとマーラの伝説中にナーガ崇拝に関する部分が存することからも裏付けられる。
- (4) 1113 年の日付入のパガン朝時代の寺院碑文と寺院壁画に Loka-p の影響が認められる。
- (5) Loka-p に使用されているパーリ語は古典パーリ語と一致せず、ビルマにおいてパーリ文化が全盛期を迎えた Anuruddha 王 (1044-1077 年) 以前のものである。

尚、Loka-p の全章の梗概を知るには BAREAU [1979] の書評が参考になろう。この他重要な書評として DE JONG [1980] が参照されるべきである。

<sup>28</sup>DENIS [1977] が校訂に用いたのはバンコク国立図書館とフランス極東学院所蔵の二写本であるが、DENIS [1977] は自著の脱稿後、マンダレーの U Kye Khin 貝葉写本コレクション所蔵の一写本の複写を入手したことを補遺で報告している。DENIS [1977: II, 309-314] によると、この写本は 1845 年に筆写された 98 葉から成る貝葉写本であるという。しかし手書きで複写する過程で生じたと思われる誤りを夥しく含んでおり、また本文の校訂に用いた二写本の破損箇所、復元不能箇所について同じ読みを呈示していることから、同写本は DENIS 自身がテキスト校訂に用いた二写本の基となった写本であるとは推定できず、写本自体との対校の必要性を指摘している。

<sup>29</sup>Loka-p の宇宙論に関する部分の部派所属を廻っては有部説と非有部説が存在し、具体的な部派特定はなされなかったが、岡野 [1998] により正量部説が確定的となった。岡野 [1998] は正量部の宇宙論を題材にしたカーヴィア作品 *Mahāsāmvartanīkathā* とその源泉となった『有為無為決択』第八章所収の引用文献と Loka-p、『仏説立世阿毘曇論』の間に複数の一致箇所があることを指摘し、それらを『俱舍論』や漢訳『長阿含経』等の対応箇所をつき合わせた結果、前四者の一致箇所が有部や法蔵部の伝承する対応箇所と一致しないことを明らかにした。



DENIS [1976, 1977] も概ね DUROISELLE [1904] の推定を支持する。DENIS [1977: II, 201] は Loka-p 所伝のウパグプタ物語が Divy、『大莊嚴論経』の所伝と相違する点として、次の四点を挙げる。

- 『大莊嚴論経』、Divy の所伝はウパグプタがマーラを罰する理由を、マーラがウパグプタの禪定を妨げたことに置き、ウパグプタがマーラに僧団に妨害を二度と加えないことを約束させたと伝える。Loka-p の所伝はウパグプタがマーラを罰する理由を、アショーカ王が八万四千塔を供養するのを妨害しようとしたことに置く。
- ウパグプタがマーラを山に縛り付ける記述は『大莊嚴論経』、Divy には見られない。
- 『大莊嚴論経』の所伝は、ウパグプタがマーラの首に三種の屍を結び付けたと伝えるが、三種の屍が何であったかについては触れない。Divy の所伝は三種の屍を蛇、犬、人間の屍であったと伝える。Loka-p の所伝は犬の屍であったとしか伝えない。
- 『大莊嚴論経』、Divy の所伝ではマーラは仏陀の教えに改宗して天界に昇って行ったと伝えるが、Loka-p の所伝ではマーラは仏陀となることを決意したと伝える。

DENIS [1977] の挙げる相違点は以上の通りであるが、DENIS [1976: 105–106; 1977: I, xlv–xlvi] は結論として、Loka-p 所収のウパグプタ物語の大筋は北伝のものと一致し、Loka-p 所収のアショーカ王伝の作者が北伝伝承からウパグプタ物語の着想を得たことは疑い得ないと主張する。しかし Loka-p 所収のマーラ調伏譚が北伝の伝承に依拠したものであるという推定は正しいとしても、DUROISELLE [1904] と DENIS [1977] は Loka-p の所伝と『大莊嚴論経』、Divy、ターラナータの所伝との関係を論じるのみであり、『賢愚経』を始めとする漢訳資料中の並行話との関係を綿密に検討してはいない<sup>30</sup>。そこで以下に Loka-p 所収マーラ調伏譚と 2 に挙げたマーラ調伏譚の諸伝本を比較検討し、その相互関係を考えてみたい。

## 4.2 Loka-p 所収のマーラ調伏譚梗概

まず初めに Loka-p 所収のマーラ調伏譚の構成を見てみよう。Loka-p の所伝は以下 (i)–(iv) に示すモチーフから構成されている。

### (i) 導入

八万四千塔を建立したアショーカ王はガンガー河の河畔にある仏塔を供養するため、河から半由旬の所に燈台を造らせて火を点す。比丘と民衆は仏塔を供養しようとして集まる (170.2–5)。

### (ii) マーラとウパグプタの神変争い

<sup>30</sup>尚、STRONG [1992] はその第九章を Loka-p 所収のウパグプタ伝説の論考に充てている (STRONG [1992: 186–208])。当該章に先立って STRONG [1992] はアショーカ王伝説中に存するウパグプタ伝説について「マトゥラー伝説群 (Mathuran cycle)」、「アショーカ伝説群 (Aśokan cycle)」という二つの伝説群が認められることを序論で指摘する (STRONG [1992: 10–11])。彼の所説によれば、前者は其中でウパグプタが自身に関するアヴァダーナの主人公として現れるものであり、後者はウパグプタがアショーカ王との関連で現れるものであるという。この二つの伝説群を前提として STRONG [1992: 12–13] は Loka-p の成立を次のように推定する。つまり、マトゥラー伝説群とアショーカ伝説群は Loka-p で初めて完全に融合された。現に Divy ではウパグプタのマーラ調伏物語はアショーカ王とは何ら関連を持たず、専らマトゥラー伝説群に属するが、Loka-p では両者は最早容易に分離できない形で接合されてしまっているのである、というのである。しかし残念ながら STRONG [1992: 186] は以上に基づいて “The Lokapaññatti’s account of Upagutta can itself be divided into two halves. The second half—featuring the saint’s binding and conversion of Māra—we have already discussed. It has clear affinities with the Mathuran cycle of Sanskrit tales and need not concern us further here.” と発言して Loka-p の材源問題の議論に踏み込むことを早々に避けている。尤も漢訳伝承を度外視する限りは、DUROISELLE [1904] と DENIS [1977] 以上の成果が得られないことは認められねばならない。

## ウバグプタのマーラ調伏物語(山崎)

- 第一戦 マーラは風雨を起こして仏塔供養を妨害する。ウバグプタ長老は神通力を用いてマーラが術現を起こしたのを知り、風雨を退ける(170.5-7)。  
第二戦 マーラは砂の雨、砂利の雨、石の雨、炭の雨を降らせる。ウバグプタはこれを大きな捕え網で捕え、地輪の外に退ける(170.8-10)。  
第三戦 マーラが牛を化作すると、ウバグプタは虎を化作して牛を捕える(170.10-14)。  
第四戦 マーラは七つ頭の龍を化作すると、ウバグプタはガルダ鳥を化作し、龍の頭を攻撃する(170.14-16)。  
第五戦 マーラは椰子の木の高さ程の夜叉を化作すると、ウバグプタはその二倍の高さの夜叉を化作する(170.16-22)。

### (iii) マーラの首に屍を結び付けるウバグプタ

マーラは美しい人間の姿をとり、ウバグプタに近寄る。ウバグプタは犬の屍を化作しマーラの首に結び付ける。マーラは助けを求め、四大天、インドラ、ヤマ、兜卒天、自在天、他化自在天、梵天の所に赴いて、犬の屍を取り除いて貰おうとするが、失敗する。マーラはウバグプタに降伏を申し出る。ウバグプタは犬の屍を外し、腰帯でマーラを山に縛り付けて七年七カ月七日の間、そこに留まるよう約束させる(171.1-172.13)。

### (iv) マーラによる仏陀の色身顕示

マーラが「自らに善根があるなら、自らも一切衆生の利益を願う仏となりたい」と発願すると、ウバグプタはマーラのもとに現れる。ウバグプタはマーラに仏陀の色身を示すよう請う。マーラは了承し、仏陀の姿を化作する。ウバグプタはその姿を見て敬礼する。一方アショーカ王は七日後、仏塔の前で自らの体に火を点し、仏塔を供養し、七日間法を聴聞して去る(172.13-174.19)。

## 4.3 Loka-p 所収のマーラ調伏譚の類型化

Loka-p の所伝のうち、導入部である (i) と次のモチーフ (ii) を除く (iii) と (iv) は概ね北伝の諸伝承と一致する。また DENIS [1977: II, 201] が指摘するように、「ウバグプタがマーラに犬の屍を結び付けた」と伝えている点で Divy 系統の三伝本と相違を見せる。すなわち次の通りである。

### [Loka-p 171.5-8]

tato therō kukkurakuṇapaṃ duggandharūpaṃ kimisampunṇaṃ avokkhaṃ asuciṃ paramajegucchaṃ abhinimmitvā tassa kaṇṭhe laggāpesi taṃ na keci muñcituṃ sakkonti devabrahmādayo pi.

それから長老は嫌な臭いが漂い、虫が沢山わいた、見るに堪えない、不潔で、この上なく嫌悪感を催させる 犬の屍 を化作し、彼の首に結び付けた。その〔屍は〕如何なる者も外してやる事が出来ないものであった。神々や梵天を始めとする者でさえも。

ウバグプタがマーラに結び付けた屍を「犬の屍」と伝えるのは『賢愚経』、『注維摩詰経』とターラナータの所伝の三本である。この点で Loka-p の所伝は Divy 系統の三伝本の伝える伝承よりも、『賢愚経』に代表される伝承に親近性を示すことが知られる。また (iii)-(iv) の中にも DENIS [1977: II, 201] が指摘するように、Divy 系統三伝本との細かな相違点が存する。すなわち次の点である。

- (1) 犬の屍を結び付けられたマーラが助けを求めて訪れる神々の名は順に四大天、インドラ、ヤマ、兜卒天、自在天、他化自在天、梵天である(171.9-172.3)。
- (2) ウバグプタはアショーカ王が八万四千塔を供養する七年七ヶ月七日の間マーラを山に縛り付ける(172.6-13)。
- (3) マーラは仏陀になろうと発願する(172.14-22)。
- (4) マーラは仏陀の三十二相と彼の声聞を化作する(173.16-19)。

(5) アショーカ王は自らの身体に火を点し、仏塔を崇拜し、七日七晩法の教示を聴聞する (174.5–19)。

これらの相違点のうち、(1) はどの所伝の記述とも合致しない。但し 2 で述べたように、神々の名は口承段階、或いは漢訳段階で省略された可能性が多分に考えられる。故にこの相違点に着目して Loka-p の所伝と他伝本との関連性を議論するには限界があろう。(2)(5) は Loka-p の編者がマーラ調伏譚をアショーカ王の仏塔崇拜伝説に埋め込んだ結果必然的に書き加えた個所であり問題とならない。(3) に相当する記述はどの所伝にも見出されない。(4) については、Loka-p は次のように伝える。

**[Loka-p 173.16–19]**

atho kho so māro bhagavato rūpaṃ dvatiṃsamahāpurisalakkhaṇapaṭimaṇḍitaṃ byāmappa-bhāsamaṅkatam dakkhiṇāvāmapasse ṭhitasāvaka yugaṃ asīmahāsāvaka gaṇaparivāritam sabbam buddhasiriyā jajjalantaṃ sappāṭiheraṃ dassesi therapamukkhassa mahājanakāyassa.

さてかのマーラは、三十二の大人相に飾られ、一尋の大きさのある後光に飾られ<sup>31</sup>、左右の脇に二人の声聞が立っており、八十人の偉大な声聞の集まりに取り巻かれ、仏陀の発する神々しい輝きで繰り返し燦々と光を発しており、神変を伴った、ありとあらゆる世尊の姿を〔ウバグプタ〕長老を先頭に立てた偉大なる群衆に示した。

この記述は「於大林中變為仏身相好具足放大光明。作諸弟子皆如舍利弗等。大衆圍繞從林間來」(T419b9–11) と伝える『注維摩詰經』の所伝にやや類似する。しかし『注維摩詰經』の所伝と Loka-p との密接な関連性を窺わせる物語要素は他には見出されない。

さてモチーフ (ii) は北伝のアショーカ王伝説中に対応箇所が見られないが、興味深いことに類似したモチーフが『賢愚経』<sup>32</sup>、『根本説一切有部律破僧事』に存する<sup>33</sup>。それは仏弟子舍利弗と外道ラクタークシャの神変競争を描く個所である<sup>34</sup>。両者の伝える神変争いの内容は次の通りである。

**[賢愚経]**

第一戦 六師外道の弟子の一人、ラクタークシャ(勞度差)は大衆の前で樹木を化作する。舍利弗は神通力で嵐を起こし化作された樹を根こそぎ吹き飛ばして破壊する<sup>35</sup>。

第二戦 ラクタークシャが七宝から成る蓮池を化作すると、舍利弗は六牙象を化作し、池の水を飲み干してしまう<sup>36</sup>。

<sup>31</sup> 付論訳註 20 を参照されたい。

<sup>32</sup> T420b14–420c11.

<sup>33</sup> Saṅghabh (Roma: Istituto italiano per il medio ed estremo oriente, 1977) 174.25–6; D Nga95a1–5; P Ce81a5–81b3; N Nga132a4–132b4; U Nga 85a1–5; L Nga 123a4–123b4; T#1450, 140b27–c10. この他『根本説一切有部律臥坐具事』、『衆許摩訶帝經』に並行モチーフが存するが、前者は『根本説一切有部律破僧事』の所伝と逐語的に一致し、後者は『根本説一切有部律破僧事』に基づいて著されたものであるので、引用は省略する。

<sup>34</sup> このモチーフの並行文献について筆者が参照したのは次の発表資料である。岡本健資「舍衛城における異教徒と仏弟子シャーリプトラの争い」(第 15 回インド思想史学会発表資料, 京都, 2008 年 12 月)

<sup>35</sup> T420b14–19: 六師衆中。有一弟子。名勞度差。善知幻術。於大衆前。呪作一樹。自然長大。蔭覆衆會。枝葉鬱茂。花果各異。衆人咸言。此變乃是勞度差作。時舍利弗。便以神力。作旋嵐風。吹拔樹根。倒著於地。碎爲微塵。衆人皆言。舍利弗勝。今勞度差。便爲不如

<sup>36</sup> T420b19–25: 又復呪作一池。其池四面。皆以七寶。池水之中。生種種華。衆人咸言。是勞度差之所作也。時舍利弗。化作一大六牙白象。其一牙上。有七蓮花。一一花上。有七玉女。其象徐摩。往詣池邊。并含其水。池即時滅。衆人悉言。舍利弗勝。勞度差不如。

第三戦 ラクタクシャが七宝や樹木や花々、泉に飾られた山を化作すると、舍利弗は金剛力士を化作し金剛杵で山を跡方もなく粉碎する<sup>37</sup>。

第四戦 ラクタクシャは十の頭を持つ龍を化作し、宝石を降らせ、雷鳴を轟かせると、舍利弗はガルダ鳥(金翅鳥王)を化作し、龍を引き裂いて口の中に入れてしまう<sup>38</sup>。

第五戦 ラクタクシャが牛を化作すると、舍利弗は獅子を化作し、牛を引き裂いて食してしまう<sup>39</sup>。

第六戦 ラクタクシャが夜叉を化作すると、舍利弗は毘沙門王を化作する。夜叉は恐怖に怯えて逃げる<sup>40</sup>。

[根本説一切有部律破僧事]

第一戦 舍利弗は外道と話し合い、外道の化作した神変を神通力で破壊してみせることを約束する。外道ラクタクシャが花を付けたマンゴ樹を化作すると、舍利弗は風雨を起こし、マンゴ樹を根こそぎ引き抜き、破壊してあちこちにまき散らす<sup>41</sup>。

第二戦 ラクタクシャが蓮池を化作すると、舍利弗は若象を化作し蓮池を悉く破壊する<sup>42</sup>。

第三戦 ラクタクシャが七つの頭を持つ龍を化作すると、舍利弗はガルダ鳥を化作し、龍を掴んで捕える<sup>43</sup>。

第四戦 ラクタクシャが屍鬼を化作すると、舍利弗はマントラを唱えて屍鬼を動けなくする<sup>44</sup>。

Loka-p の第三戦から第五戦までは『賢愚経』の第四戦から第六戦、『根本説一切有部律破僧事』の第三戦から第四戦に類似した内容となっていることが知られる。特に Loka-p の第三戦と第四

<sup>37</sup>T420b25-29: 復作一山。七寶莊嚴。泉池樹木。花果茂盛。衆人咸言。此是勞度差作。時舍利弗。即便化作金剛力士。以金剛杵。遙用指之。山即破壞。無有遺餘。衆會皆言。舍利弗勝。勞度差不如。

<sup>38</sup>T420b29-c4: 復作一龍身。有十頭。於虛空中。雨種種寶。雷電振地。驚動大衆。衆人咸言。此亦勞度差作。時舍利弗。便化作一金翅鳥王。擘裂噉之。衆人皆言。舍利弗勝。勞度差不如。

<sup>39</sup>T420c4-7: 復作一牛。身體高大。肥壯多力。羸脚利角。跑地大吼。奔突來前。時舍利弗。化作師子王。分裂食之。衆人言曰。舍利弗勝。勞度差不如。

<sup>40</sup>T420c8-11: 復變其身。作夜叉鬼。形體長大。頭上火燃。目赤如血。四牙長利。口自出火。騰躍奔赴。時舍利弗。自化其身。作毘沙門王。夜叉恐怖。即欲退走。

<sup>41</sup>Saṅghabh 174.25-175.3: tata āyuṣmān śāriputras tūrthyān āmantrayāmāsa: bhavantaḥ kiṃ tāvat kariṣyatha? āhosvid vikariṣyatha? te kathayanti: vayaṃ kurmaḥ; tvāṃ vikuru; āyuṣmān śāriputraḥ saṃlakṣayati: yadi ahaṃ kariṣyāmi; sadevako'pi loko na śakṣyati vikartum; prāg eva raktākṣaḥ parivrājakaḥ; iti viditvā raktākṣaṃ parivrājakaṃ idam avocat: tvaṃ kuru, ahaṃ vikariṣyāmi; sa indrajāle kṛtāvī; tena supuṣpitaḥ sahakārapādapo nirmitaḥ; āyuṣmatā śāriputreṇa tumulo vātavaṛṣa utsṛṣṭaḥ; yenāsau samūla utpātya itaś cāmutaś ca vikīrṇo yogi-janānām apy aviṣayibhūtaḥ 「それから舍利弗長老は外道達に呼び掛けた。『まず初めに貴方が〔神変を〕お起こしになるか、それとも〔私が起こした神変を〕破壊なさるか』と。彼等は言った。『我々が〔神変を〕起こそう。爾は〔それを〕破壊してみせよ。』と。舍利弗長老はふと気付いた。『かりに私が〔神変を〕起こすでしょう。人々は神々と組んでも〔それを〕破壊できまい。実に最初に〔神変を起こすのは〕遊行者ラクタクシャがいい。』と知って、遊行者ラクタクシャに次のように言った。『爾は〔神変を〕起こせ。私は〔それを〕破壊して見せよう』と。彼(ラクタクシャ)は奇術に精通していたので、彼はよく花を付けたマンゴ樹を化作した。舍利弗長老は轟々と音を立てる風雨を起こし、それで以てこの〔マンゴ樹)を根こそぎ引き抜き、あちこちにまき散らしたので、ヨーガ行者にさえ〔このマンゴ樹は〕認められなくなってしまった。』

<sup>42</sup>Saṅghabh 175.3-4: tatas tena padminī nirmitā; āyuṣmatā śāriputreṇa kalabhahastī nirmitaḥ; tena sā samantān marditā 「それから彼(ラクタクシャ)は蓮池を化作した。舍利弗長老は若象を化作した。そしてそれで以てそれ(蓮池)を悉く破壊してしまった。』尚、チベット訳(D95a3-4; P81b1-2; N132b1-2; U85a3-4; L123b1-2)は de nas des pad ma'i rdzing zhig sprul ba dang l tshe dang l dan pa shā ri'i bus glang po che bzang po zhig sprul nas des kun tu \*brnab ( ) Ex conj.; brnal DPU; rnal NL.) nas ming gi lhag ma tsam zhig bzhag go 「それから彼(ラクタクシャ)は蓮池を化作した。すると舍利弗長老は一頭の美しい象を化作し、それで以て〔蓮池を〕残らず粉碎し、名前だけが残るまでに破壊し尽くしてしまった。』であり、後半部が梵文と余り正確に対応しない。漢訳(T140c5-7)も「外道又化作一蓮花大池。具寿舍利弗。化為象子踐池折花。尋復平地」であり、後半部をかなり意識している。

<sup>43</sup>Saṅghabh 175.4-6: tena saptaśiṛṣo nāgo nirmitaḥ; āyuṣmatā śāriputreṇa garuḍo nirmitaḥ, yenāsāv apahr̥taḥ 「彼(ラクタクシャ)は七つの頭を持つ龍を化作した。すると舍利弗長老はガルダ鳥を化作した。それで以てこれ(龍)を掴んで捕えてしまった。』

<sup>44</sup>Saṅghabh 175.6: tena vetāḍo nirmitaḥ; āyuṣmatā śāriputreṇa mantraiḥ kilītaḥ 「彼(ラクタクシャ)は屍鬼を化作した。舍利弗長老はマントラを唱えて〔屍鬼を〕動けなくした。』

戦、『賢愚経』の第四戦と第五戦はほぼ同じ内容である。従って Loka-p の作者はラクタークシャと舎利弗の神変競争モチーフないしはそれに類したモチーフを知っており、それを下敷きにしてマーラとウバグプタ長老の神変競争モチーフをマーラ調伏譚中に挿入した可能性が考えられるであろう。

以上から Loka-p 所伝マーラ調伏譚の材源について次のような結論が導かれよう。

- Loka-p の所伝が一種類の屍のみを伝えている点を考慮すると、Loka-p の所伝は Divy 系統の伝承ではなく、『賢愚経』に代表される所伝に親近性を示す。
- Loka-p の作者はラクタークシャと舎利弗の神変競争モチーフもしくはこれに類したモチーフを知っており、アショーカ王の仏塔供養伝説にマーラ調伏譚を挿入するに当たり、同様のモチーフを付け加えた可能性がある。

アショーカ王伝説は複雑な成立過程を経ており、その成立史を辿ることは決して容易ではない。アショーカ王伝説の思想史的、文化史的背景を探ること自体は魅力ある作業であるが、その作業の前段階として諸伝本の複雑な歴史的相互関係を把握しておくことは不可欠である。マーラ調伏譚の伝本としてはこの他に、大乘仏教徒がクシェーメンドラ本の詩節を借用しつつ Divy 本を詩形改稿して著した *Aśokāvadānamālā* の伝承があり、大乘仏教徒がマーラ調伏譚をどのように改作したかを知る上で重要であるが、その検討は今後の課題としたい。

## 付論1 Loka-p 所収マーラ調伏譚和訳研究

### 和訳に当たって

以下に Loka-p 所収マーラ調伏譚の和訳を試みる。底本に用いたのは DENIS [1977: I, 170–174] の校訂テキストである。先行訳としては DUROISELLE [1904: 425–428]、DENIS [1977: I, 150–152] の仏訳、STRONG [1992: 200–201, 207–208] の部分英訳があり、和訳に際してはこれらを参照した。STRONG [1992] の英訳は簡潔で論理明晰な米語を用いた点で高く評価できるが、訳語の欠落や意訳箇所があり、原典訳としての信頼性は残念ながら前二者に及ばない。

DENIS [1977] の校訂テキストは厳密な文献学的手法に基づいて作成された完成度の高いものであり、翻訳不能箇所の殆どは校訂に用いられた写本のコラプトに起因するものである。しかしごく僅かながら校訂者の誤植等に起因する、修正すべき箇所も見出され、これらに対する筆者の修正案を脚注に示した。和訳中の頁数と行数は DENIS [1977] の校訂テキストの頁数と行数を指す。和訳に付した見出しは筆者によるものである。

## 和訳

### 1 導入 (170.2–5)

それからアショーカ王はガンガー河の岸辺にある大きな仏塔を最初に供養しようとして、ガンガー河から半由旬程の所に一群の燈明を点す鉢を造らせた<sup>1</sup>。そして大きな仏塔の周りで燈明に火を点した。沢山の人々と沢山の比丘の集団が大きな仏塔を崇敬、供養しようとして集まって来た。

<sup>1</sup>pātidīpaṅgaṇa の解釈は難しいが、DUROISELLE [1904: 425] は “un enclos de lampes” 「燈明の囲い」の訳語を充て、「油を入れた陶製の小壺でできた、一列の燈明 (un cordon de lampes consistant en petits pots de terre, *pāṭī*, remplis d’huile)」と説明している。DENIS [1977: II, 199] によると、タイの仏教僧院で祭事に用いられるものだという。

## 2 マーラとウパグプタの神変争い

### 2.1 第一戦 (170.5-7)

するとマーラは風雨を起こした。燈明を消そうとして。〔人々が〕仏塔を供養するのを邪魔しようとして。その瞬間ウパグプタ長老は〔アショーカ王が仏塔を供養するのを護ろうという〕決意から生まれた神通力で、風雨を全てマーラが引き起こした術現だと理解し<sup>2</sup>、〔風雨を〕遠方に退けた。

### 2.2 第二戦 (170.8-10)

かのマーラは恐れ慄いて、今度は砂の雨を降らせた。砂利の雨、石の雨、炭の雨を降らせた。長老は〔アショーカ王が仏塔を供養するのを護ろうという〕決意から生まれた神通力で化作した大きな捕え網を用いて全てを覆い隠し、世界を構成する円輪の外側へ退けてしまった。

### 2.3 第三戦 (170.10-14)

するとマーラは怒り狂って、今度は巨大な特牛の姿形をとった〔姿を〕化作して猛進させ、一群の燈明を点す鉢を壊そうとした。長老も虎の姿形をとった〔姿を〕化作して、その虎という姿形でて特牛を捕えた。〔捕えられた特牛は〕氣力を失ってしまった。〔虎は〕恐ろしく咆哮した<sup>3</sup>。多くの群衆は〔それを〕見た。王も比丘僧団もあらゆる生きとし生けるもの達も〔それを〕見た。

<sup>2</sup>「ウパグプタ長老は・・・理解し」に当たる原文は *thero upagutto adhiṭṭhānidhiyā sabbam māraṣṣa vikāraṃ vātavuṭṭhiṇi ca pariggahetvā* である。当該箇所は *pariggahetvā* を廻って二通りの解釈がある。DUROISELLE [1904: 425]、DENIS [1977: I, 150] は *pariggahetvā* を「理解する」、「見抜く」という意味に解釈し、それぞれ “le therā Upagutta, par le pouvoir de sa résolution, saisit cette pluie et ce vent formés par Māra ...” 「ウパグプタ長老は自らの決意の力でマーラが起こしたその風雨を感じ取り」、「le doyen Upagutta, par le pouvoir de son vœu mental, saisit le vent et la pluie, provoqués par Māra ...” 「ウパグプタ長老は、自らの心の決意の力でマーラが引き起こした風雨を感じ取り」という訳を充てている。これに対し STRONG [1992: 201] は *pariggahetvā* 「捕える」という意味に解釈し、“the elder Upagutta, using his supernatural powers of resolution, enveloped all of Māra’s disturbing wind and rain and ...” という訳を充てている。但し、*pariggahetvā* に “enveloped” という訳語を充てるのは語義に忠実な解釈とは言えない。また続くウパグプタとマーラの第二戦を物語る箇所に *thero adhiṭṭhānidhimayena viṭṭhinnapāseṇa sabbam paṭicchitvā* 「長老は〔アショーカ王が仏塔を供養するのを護ろうという〕決意から生まれた神通力で化作した大きな捕え網を用いて全てを覆い隠し」という表現があるのを考慮すると、*pariggahetvā* は DUROISELLE [1904] と DENIS [1977] の如くに解釈するのが妥当であろう。尚、STRONG [1992] の *māraṣṣa vikāraṃ vātavuṭṭhiṇi ca* に対する訳 “Māra’s disturbing wind and rain” は *vikāra* を正確に訳した解釈ではあるまい。

<sup>3</sup>「長老も・・・咆哮した」にあたる原文は、*thero pi byaggharūpaṃ nimminivā tena byagghena rūpeṇa usabho gahito adharo jāto bheravaṃ ravati* であり、DUROISELLE [1904: 425]、DENIS [1977: I, 150] はそれぞれ “Le therā créa la forme d’un tigre. Le taureau, saisi par le tigre et étant le plus faible, poussa un cri terrible.” 「長老は虎の姿を化作した。特牛は虎に捕えられ、すっかりひ弱になってしまい、恐ろしい鳴き声を上げた」、 “Le doyen prit la forme d’un tigre. Le taureau, saisi par le tigre et étant le plus faible, poussa un cri terrible.” 「長老は虎の姿をとった。特牛は虎に捕えられ、すっかりひ弱になり、恐ろしい鳴き声を上げた」という訳を充てるが、いずれも「特牛が恐ろしい鳴き声を上げた」と解釈する点で同じである。当該文は文の切れ目をどこに置かかで解釈が異なってくるが、*bheravaṃ* 「恐ろしく」という副詞と繋がりが強いのは特牛ではなくて虎であるように思われる。従って *jāto* の後に文の切れ目を置き、「〔虎が〕恐ろしく咆哮した」と解釈するのが自然ではないか。

## 2.4 第四戦 (170.14-16)

かのマーラは氣力を挫かれたので、特牛の姿を捨て、七つの頭を持つ龍の姿を化作し、虎に咬み付けようとした。長老も虎の姿形をとった〔姿を〕捨て、ガルダ鳥の姿形をとった〔姿を〕化作し、龍の頭に咬み付け、引き裂いて去って行った<sup>4</sup>。

## 2.5 第五戦 (170.16-22)

かのマーラは氣力を挫かれ、策略が不首尾に終わったこと、受けた代償のせいで苦しめられて、龍の姿形をとった〔姿を〕捨て、巨大な、頭が夜叉の姿形をとった〔姿を〕化作し<sup>5</sup>、巨大な、椰子の木程の高さのある、鉄で出来た棒を化作し、その激しく燃えている棒を手を取った。それを用いてガルダ鳥の頭を叩きのめそうとして。長老もガルダ鳥の姿を捨て、それ(マーラの化作した夜叉)の二倍もある、もっと巨大な夜叉の姿形をとった〔姿を〕を化作し、二本の燦々と燃え輝いている鉄の棒を化作し、二本の棒を持った手でマーラの頭を叩きのめそうとした。

<sup>4</sup>原文は *nāgassa sīsaṃ daṃsitvā kaḍḍhaṃ karonto gacchati* であり、DUROISELLE [1904: 425] は “saisissant la tête du nāga, le trāina.” 「ナーガの頭を捕えて、それ(ナーガ)を引っ張った」、DENIS [1977: I, 150] は “ayant mordu la tête du nāga, il (scil. garuḍa) le trāina.” 「ナーガの頭に噛みついて、それ(ガルダ鳥)はそれ(ナーガ)を引っ張った」の訳語を充てている。しかし *kaḍḍha* (Skt. *karṣa*) という語は PTSD、CPD、CONE の辞書のいずれにも用例が見出されない。

<sup>5</sup>原文は *mahantaṃ sīsayakkharūpaṃ abhinimmitvā* であり、DUROISELLE [1904: 425]、DENIS [1977: I, 150] はいずれも *mahantaṃ sīsayakkharūpaṃ* を “un *yakkha* avec une énorme tête” 「巨大な頭を持つ夜叉」の訳語を充てている。しかし *mahantaṃ* 「巨大な」を *sīsayakkharūpaṃ* という複合語の前分要素 *sīsa* に掛けるのは自然な解釈ではない。寧ろ後分要素 *rūpa* に掛けるのが妥当であろう。しかしこの *sīsayakkharūpa* という複合語の解釈が難しい。可能性として考えられる解釈は次の三つである。

- (1) *sīsayakkha* を前分要素、*rūpa* を後分要素と見なし、前分要素 *sīsayakkha* を所有複合語として *sīso yakkhassa* [*sīso*] *yassa* 「その頭が夜叉の〔頭である〕者」と解釈し、*sīsayakkharūpa* を「夜叉の頭を持つ者の姿」と理解する。
- (2) *sīsayakkha* を前分要素、*rūpa* を後分要素と見なし、前分要素 *sīsayakkha* を格限定複合語として *sīsenayakkho* 「頭から自らの正体を知られる夜叉」と解釈し、*sīsayakkharūpa* を「頭から自らの正体を知られる夜叉の姿」と理解する。
- (3) *sīsa* を前分要素、*yakkharūpa* を後分要素と見なし、全体を所有複合語として *sīso yakkharūpaṃ yassa* 「その者の頭が夜叉の姿形をとった者」と理解する。

解釈 (1) をとる場合、*sīsa* と *yakkha* の順序が不自然である点に問題が残る。寧ろ *yakkhasīsa* (*yakkhassa* [*sīso*] *sīso yassa*) という形が期待されるべきであろう。解釈 (2) をとる場合、文法上問題はないが、*sīsa* が意味上浮いてしまう。残るは解釈 (3) ということになるが、Loka-p におけるこの一連の神変競争の文脈で用いられる動詞 (*abhi*)*nimmināti* ないしは *karoti* の目的語の形に着目してみると、次の如くとなる。

(1) 特牛		<i>usabharūpaṃ mahantaṃ nimminivā</i>
(2) 虎		<i>byaggharūpaṃ nimminivā</i>
(3) 龍		<i>nāgavaṇṇaṃ abhinimmitvā</i>
(4) ガルダ鳥		<i>garuḍarūpaṃ abhinimmitvā</i>
(5) 夜叉		<i>taddiguṇaṃ mahantaraṃ yakkharūpaṃ abhinimmitvā</i>
(6) 人間		<i>so manussarūpaṃ vaṇṇaṃ ... katvā</i>

いずれも *vaṇṇa* ないしは *rūpa* を目的語としていることが知られる。ここで *vaṇṇa* と *rūpa* のいずれが化作対象であるかという問題が浮上するが、六番目の用例で「彼は・・・人間の容姿をとった姿を作り出して」という表現がある点を考慮すると、(*abhi*)*nimmināti* 或いは *karoti* の化作対象は *vaṇṇa* である可能性が高いことが知られよう。従って上記用例を根拠に *mahantaṃ sīsayakkharūpaṃ* [*vaṇṇaṃ*] *abhinimmitvā* 「巨大な、頭が夜叉の姿形をとった〔姿を〕」という訳を充てる。

### 3 マーラの首に屍を結び付けるウパグプタ

#### 3.1 犬の屍をマーラの首に結び付けるウパグプタ (171.1-8)

かのマーラは恐れ慄いた。彼には次なる〔考えが〕起こった。「私が化作したものは凡そ何であれ、この沙門はそれを二倍にして化作してしまった。私は今何をなしてやろうか。私は打ち負かされた者となってしまった。」と。彼は絶世の、素晴らしい<sup>6</sup>、香料を塗り込んだ、装飾具に飾られた人間の容姿をとった姿を作り出して長老の前に留まった<sup>7</sup>。長老も彼を見て次のように考えた。「さあ今こそ私はこの夜叉が〔善からぬ〕望みを抱かぬようになしてやろう。」と。それから長老は嫌な臭いが漂い、虫が沢山わいた、見るに堪えない、不潔で、この上なく嫌悪感を催させる犬の屍を化作し、彼の首に結び付けた。その〔屍は〕如何なる者も外してやる事が出来ないものであった。神々や梵天を始めとする者達でさえも。

#### 3.1 神々に助けを求めるマーラ (171.8-172.3)

このようになしてから、「波旬よ、爾は去れ。」と〔ウパグプタは〕言い添えた。かのマーラは実に首に付けられた犬の屍と一緒に<sup>8</sup>、四人の世界の守護神のいる所へ行ってから、彼等に次のように言った。「皆様方、私の首から犬の屍を外して下さいませ。」と。彼等は言った。「友よ、誰が爾の首に〔犬の屍を〕結び付けたのかね。」と。彼は言った。「皆様方、比丘ウパグプタが結び付けたのです。」と。彼等は返答した。「もし彼がかく結び付けたのなら、我々はその〔屍〕を外してやる事が出来ぬ。あの比丘は偉大な力を備え、偉大な神通力を備えた者であるから。」と<sup>9</sup>。そこでかのマーラは神々の王インドラのいる所へ向かった。インドラも次のように言った。「友よ〔私は〕外してやれぬ。」と。そこでかのマーラは神々の王ヤマのいる所へ〔向かったが、〕彼も〔屍を外すことが〕出来なかった。そこで彼は兜卒天のいる所へ、それから自在天のいる所へ、それから神々の王である他化自在天のいる所へ〔行った<sup>10</sup>。〕彼も次のように言った。「友よ、〔屍を〕外してはやれぬ。かの比丘は偉大な力を備えた者であるから。」と。さてそこでマーラ波旬は梵天世界へと向かった。そうして<sup>11</sup>、大梵天に近づいて次のように述べた。「おお、大梵天様、私の首から不浄なる屍を外して下さい。私に憐みの心を御示して下さい。」と。かの大梵天はマーラに次のように言った。「友よ、その見るに堪えないものを外してはやれぬ。(172) かの比丘は偉大な力を備えた者であり、世尊の声聞であり、実に阿羅漢であり、六神通を備えた者であるから。彼が発

<sup>6</sup>原語は *ativākyabhūtaṃ* であるが、これを DUROISELLE [1904: 425]、DENIS [1977: I, 150] はそれぞれ “éloquent” ないしは “très éloquent” 「弁舌爽やかなる」と解釈する。しかし当該個所はマーラが化作した人間の姿の外面的な美質を描写する部分である。従って寧ろ「素晴らしい〔美質を備えた人間の姿〕」と解釈すべきであろう。

<sup>7</sup>*manussarūpaṃ* に掛る形容句 *gandhaviḷepanābharaṇabhūṣitaṃ* の解釈が難しいが、DUROISELLE [1904: 425]、DENIS [1977: I, 150] は “parfumé et chargé d’ornements” 「香り付けられ、飾りに包まれた」すなわち *gandhaviḷepana* と *ābharaṇabhūṣita* の二つの形容句からなる同格限定修飾語として解している。但し *gandhaviḷepanābharaṇa* を並列複合語と解し、全体を「香料と膏薬と装飾具に飾られた」と解釈することも可能であろう。

<sup>8</sup>*sahakukkurakuṇapeneva* を *saha kukkurakuṇapeneva* に修正する。

<sup>9</sup>「友よ・・・備えた者であるから。」に相当する個所を DUROISELLE [1904: 426] は “Nous ne le (scil. chien) pouvons pas; il restera pendu à ton cou.” 「我々はそれ (= 犬) を〔外して〕やれない。それは爾の首にぶら下がった俣だろう。」と省略した形で訳している。

<sup>10</sup>*paranimmitavasavattidevarājā* を *paranimmitavasavatti devarājā* に修正する。

<sup>11</sup>*tathā pi* は通常逆説の意味で用いられる。しかし該当個所は明らかに順接の意味が期待されるので「そして」、「そこで」といった意味合いで用いられていると思われる。DUROISELLE [1904: 426]、DENIS [1977: I, 151] はいずれも “et là” 「そしてそこで」と解釈する。



した命令を反古にはできないのだ。友よ爾は去れ。まさしくあの比丘を敬い、快い言葉で以て請いなさい。〔そうすれば〕まさしくあの者はその不浄物を外してくれることだろう。』

### 3.2 ウパグプタに許しを請うマーラ (172.3-6)

それを聞いてマーラは邪念を抱かぬようにして、ウパグプタ長老のいる所へと向かい、犬の屍を付けた俣長老に近づいて、謙虚になって長老を快い言葉を用いて宥めながら、次のように言った。「友よ、〔貴方様〕長老はこの不浄物をどうか外されよ。友よ、爾の勝利です。私は打ち破られました。」と。

### 3.3 マーラを束縛するウパグプタ (172.6-14)

長老は次のように言った。「波旬よ、そこにある山へ行こうではないか。」と。両名はそこに行き、〔ウパグプタは〕その犬の屍を外してやってから、自分の腰帯をマーラの腰に結び付け、腰帯を長く伸ばして山に巻き付かせてからきつく縛り、次のように言った。「マーラよ、茲に留まっておれ。去ってはならぬぞ。アショーカ王が七年七カ月と七日の間、大きな仏塔に対する祭礼を催され、供養をなされるであろう間<sup>12</sup>、同じ場所に留まっておれ。」と。かのマーラは実に不承不承ながら、沈黙を保った。そして長老は去り、安穩に時を過ごした<sup>13</sup>。かくして長い時間が過ぎた。大祭礼が終わると、長老は再びその場所へ行き、マーラの言葉を聞こうとして身を潜めて、座した。

## 4 マーラによる仏陀の色身顕示

### 4.1 マーラの発願 (172.14-22)

かのマーラは鬱々とした気分になって、世尊の諸々の優れた性質のことを思い出し、次のように言った。「以前、実に私は或る時<sup>14</sup>、世尊の前で種々の妨害を〔なした〕。しかし世尊は如何なる過失も犯さなかった。今憐みの心のない声聞はかく私に苦痛を与えようとしている。」と。彼は苦しんで、恐怖心からその山を足で踏みつけ、〔山の周囲を〕回った。再び落ち着きを取り戻してから、世尊の優れた性質・・・(乃至)・・・忍耐、温和さ、あらゆる仏陀の優れた性質について考えて<sup>15</sup>、次のように言った。「もし私に善根があるならば、丁度仏世尊が世間に現れたように、来世において、私もまた大いなる憐みの心を備え、一切衆生の利益を願う仏になりたい。」と。

<sup>12</sup>相当する原文は *yāva rājā asoko sattavassaṇ ca sattamāsaṇ ca sattadivasaṇ ca mahāthūpussāvanikaṃ pūjaṇ ca niṭṭhāpessati* であるが、*mahāthūpussāvanikaṃ pūjaṇ ca* の解釈が難しい。DUROISELLE [1904: 426]、DENIS [1977: I, 151] はこの一文にそれぞれ “jusqu’à ce que le roi Asoka ait achevé les fêtes de la dédicace du grand stūpa et lui ait rendu hommage pendant sept ans, sept mois et sept jours” 「七年七カ月七日の間、アショーカ王が大いなる仏塔への奉獻祭を遂行され、それ (= 仏塔) に供養をなされる間」 “Jusqu’à ce que le roi Asoka ait achevé les fêtes de la dédicace du grand stūpa et fait l’offrande rituelle, pendant sept années, sept mois et sept jours” 「七年七カ月七日の間、アショーカ王が大いなる仏塔への奉獻祭を遂行され、典礼供養をなされる間」という訳を充て、*ussāvanika* を *ussava* と同義に解しているようである。しかし *ussāvanika* という語形は PTSD、CPD、CONE の辞書には典拠が見られない。論理的には *mahāthūpassa ussavam pūjaṇ ca* 「大きな仏塔への祭礼と供養を」という読みが最も望ましい。ここでは暫定的にこのように読む。要検討。

<sup>13</sup>*yathā sukhaṃ* を *yathāsukhaṃ* に修正する。

<sup>14</sup>原文は *tadāci* であるが、これでは意味が通じない。単なる誤植と思われるから、DUROISELLE [1904] の校訂テキストの読み *kadāci* を採用する。

<sup>15</sup>原文は *bhagavato guṇaṇ ca yāva khantiṃ soraccaṇ ca sabbabuddhaguṇaṃ vicinanto* であるが、DUROISELLE [1904: 426] はこれを “il examina minutieusement toutes les vertus d’un Buddha” 「彼は仏陀のあらゆる美德を事細かに検討した」という省略した形で訳している。

## 4.2 マーラを赦すウパグプタ (172.22–173.12)

かく述べただけで長老は飛ぶ様にしてやって来て (173) 束縛を速やかに解き、彼に詫びた。「許してくれ。マーラよ。私は爾を利益したのであり、〔アショーカ〕王が徳を積むことを〔爾が〕阻害するのを止めさせたのだ<sup>16</sup>。マーラよ、爾は仏になろうという誓いを立てたのだから、供養に値する者だ。」と。彼(マーラ)は次のように言った。「無慈悲な声聞である貴方方のような、そのような声聞と私はなりませう。丁度、爾が無慈悲であるように。」と。長老は言った。「爾は悲しんではならない。私の力で〔爾は〕仏となろうと欲したのだ。『〔彼は〕必ず仏になるであろう。』と考えて世尊も爾に授記した。『マーラはウパグプタに教導され、調伏され、仏たらんという誓いを立てるだろう。』というように。どうか私に恩恵を施し、私を思いやってはくれないか。世間に世尊が現れたと言われている。私は世尊の法身は見ているけれども、色身は未だ嘗て見たことがない<sup>17</sup>。それ故〔私を〕思いやって、二人の弟子を連れ、取り巻きの者を連れ、ありとあらゆる善い性質を備えた、かの世尊の色身を神通力で以てはつきりと見せてくれ。〔私は〕世尊を見ようと思うのだ。」と。マーラは言った。「もし爾が私を〔世尊本人だと勘違いして〕崇敬しないのなら、そのようになしましう。」と。長老は承諾した。

## 4.3 仏陀の色身を顕示するマーラ (173.12–174.5)

さてかのマーラは或る深い森の中に入って行った。そして長老が神通力を用いて沢山の比丘達を速やかに呼び集めると、すると別の、世尊を一目見ようとする者達は誰彼構わず皆、焼香や香料、膏薬を手にしてウパグプタ長老を取り巻き続けた<sup>18</sup>。〔彼等は〕「世尊に見えん、そして供養せん。」と言って、長老を先頭に立て、〔長老を〕ずっと見えないようにした<sup>19</sup>。さてかのマーラは、三十二の大人相に飾られ、一尋の大きさのある後光に飾られ<sup>20</sup>、左右の脇に二人の声聞が立つ

<sup>16</sup>原文は *tayā attho mayā nibbāhito rañño ca puññantārayo* (lies: -antarāyo) mocito であるが解釈が難しい。DENIS [1977: I, 151] は “c’est dans ton intérêt que j’ai agi, et pour ôter l’obstacle à l’action méritoire du roi.” 「王の徳ある行いを阻むものを除くべく、爾の利益の為に私は行動したのだ」という訳を充てる。しかし冒頭が *tayā* という具格形になっている点が奇妙である。冒頭を *tava* に変えて読めば、「私は爾を利益し、王が徳目を積むことを〔マーラである爾が〕阻害するのを止めさせたのだ」と解釈できるが、テキストの読みはこれを支持しない。尚、DUROISELLE [1904] は *nibbāhito* に対し *nibbādito* という読みをとるが、DENIS [1977: II, 203] は *nibbāhito* を写経生が誤写したものであろうと推定する。ここでは暫定的に *tayā* を *tava* の意味に理解する。要検討。

<sup>17</sup>ここで言う *bhūtikāya* とは *rūpakāya* 「色身」と同義であろう。しかしここで *bhūtikāya* という語が何故 *rūpakāya* と同義となるのかという問題が浮上する。*bhūtikāya* を「色身」の意味で用いている用例は残念ながらこの箇所を除いて見られないので語義解釈が難しいが、次の可能性を提案したい。

- (1) \**bhūtin* 「原素をもつ」と *kāya* 「身体」の複合語「原素を持つ者の身体」
- (2) パーリ語に翻訳される過程での *bhautikakāya* の誤写

第一解釈をとる場合、\**bhūtin* という語に用例が見られないという点で問題がある。第二解釈は該当箇所直後に再度 *bhūtikāyaṃ* とあることを考慮すると可能性が低いであろう。*rūpakāya* の誤写の可能性も考えられるが、写本伝承からは支持されないようである。

<sup>18</sup>*dhūpagandhavilepanahatthā* という複合語の解釈が問題となる。「焼香という香料と膏薬を手にして」、「焼香や香料という膏薬を手にして」、「焼香と香料と膏薬を手にして」と少なくとも三通りの解釈が考えられる。DUROISELLE [1904: 427]、DENIS [1977: I, 152] は二番目の解釈をとる。

<sup>19</sup>原文疑問。会話文の前の *parivāretvā tiṭṭhanti* という形の対応から考えて *paṭicchādetvā acchanti* とあるのが自然であるが、テキストはこれを支持しない。

<sup>20</sup>原文は *byāmapphāsamaṅkaṭaṃ* であるが、これでは DUROISELLE [1904: 427]、DENIS [1977: I, 152] の提示する “entouré d’une brillante auréole large d’une brassée” 「一尋の大きさのある輝かしい後光に包まれた」という解釈をとることは不可能である。寧ろ *byāmapphāsamaṅkaṭaṃ* 「一尋の大きさのある後光に飾られた〔世尊の姿〕」と修正すべきであろう。

ており、八十人の偉大な声聞の集まりに取り巻かれ、仏陀の発する神々しい輝きで繰り返し燦々と光を発しており、神変を伴った、ありとあらゆる世尊の姿を〔ウパグプタ〕長老を先頭に立てた偉大なる群衆に示した。そしてまた数人の師達は「アショーカ〔王〕が大臣と従者を連れてそこにおられる。」と述べた。それからウパグプタ長老は、取り巻きの者を従え、あらゆる善い性質を完全に備えた世尊の姿を見て、身体髪の毛の逆立ちを生じ、純粋な信心の気持ちが起こったせいで、マーラと交わした約束のことも忘れて、世尊の姿に五体投地して敬礼した。そして〔アショーカ〕王を先頭とする偉大なる群衆も盛大な供養をなした。マーラが仏陀の姿を全て消失せしめて、〔アショーカ〕王を先頭に立てた偉大なる群衆が去って行くと、〔マーラは〕かの〔ウパグプタ〕長老に次のように言った。「友よ、一体誰に敬礼されたのですか」と。長老は言った。「マーラよ、私は爾に敬礼したのではない。面前にいる、声聞と僧団を連れた世尊に敬礼したのだ。」と。するとマーラはその時から仏陀の教えに恭順になった。長老も心赴く俣に去って行った<sup>21</sup>。

#### 4.4 自らの身体に火を放ち、仏塔を崇拜するアショーカ王 (174.5-19)

それからアショーカ王は、一週間の後<sup>22</sup>、大きな仏塔の供養をしようとして、自分の体を首まで真綿でくるんで、五百の壺に入った香油を手首まで塗り、実に直立し、偉大なる仏塔に現前し、合掌してから、頭に油を塗り、仏陀のことを想起しながら身体に火を点した。〔その〕火は虚空中で七人分の身の丈の高さに至る迄の光と炎を発した。そして〔アショーカ〕王は仏陀を賛嘆する声を上げた<sup>23</sup>。「世尊、阿羅漢、正等覺者に帰命し奉る。そしてかの御方は多くの人々を利益する為に法を教示し、よく説明し、明らかにし、時代に即応したものとなし、皆に開かれたものとなし、〔正しい悟りへ〕導くものとなし、知者達が自ら知ることが出来るものとなし、智慧ある者達が自ら知ることの出来るものとなし、易しく得られるものとなした。世尊の声聞僧団は廉直に生き、道理に従って生き、正しく生きているのだ。」と想起した。かく〔彼が〕三宝を想起している間、火焰で身体が焼けたされることは決してなかった。身体は白檀香を塗られたが如くに冷たかった。かく二日目も、そして実に七日に至るまで全身火に包まれた俣〔アショーカ王は〕大きな仏塔の供養をなして、沐浴をなして、ありとあらゆる装飾で身を包み、大臣の集団に取り巻かれ、仏塔を敬礼して、三度右僂して、七日七晩法の教示を聞いて、比丘の僧団を楽しませ、比丘の僧団に敬礼し、取り巻きを連れて去って行った。

## 付論2 拙論「クシェーメンドラ本「クナーラ・アヴァダーナ」の源泉資料について」正誤表

昨年本誌に発表した拙論「クシェーメンドラ本「クナーラ・アヴァダーナ」の源泉資料について」を脱稿後、東京大学大学院の石井裕氏より和訳研究に対する修正案を御教示頂いた。改めて御礼申し上げる。加えて本論、脚註にも訂正すべき誤りが多々見られることが後日判明したので、以下に拙論に対する正誤表を付す。先行訳を「訳の精度」の点で問題があると難じておきな

<sup>21</sup>yathā phāsumを yathāphāsumに修正する。

<sup>22</sup>STRONG [1992: 207]には sattadivase「一週間の後」の訳が欠落している。

<sup>23</sup>原文は rājā ca buddhathutiṃ bhaṇamāno であり、STRONG [1992: 207]は“The king kept repeating a stanza in praise of the Buddha”という訳語を充てる。しかし「偈を唱え続ける」という表現は随分な意識である。寧ろ DUROISELLE [1904: 427]の“Le roi, louant le Buddha, s'écria”「王は仏陀を讃えて声を上げた」、DENIS [1977: I, 152]の“Le roi prononça les louanges du Buddha”「王は仏陀を讃える言葉を述べた」という訳が適切であろう。

から、自らが「訳の精度」に問題のある和訳を行ったことを茲に記し、自戒の縁とする。和訳の訂正については、近称と遠称の区別、虚辞の訳し忘れなどを逐一訂正することは行わなかった。本文の訂正箇所は頁数と行数、脚注の訂正箇所は頁数と脚注番号で示した。

正誤表

箇所	訂正前	訂正後
p. 63, fn. 1	BURNOUF は・・・加えている	(削除)
p. 64, l. 14	Lüders [1926: 74]	LÜDERS [1926: 74]
p. 65, fn. 16	M <sup>lle</sup> Volkova	M <sup>lle</sup> Volkova
p. 72, fn. 1)	PRZYLSKI [1923: 290]	PRZYLUSKI [1923: 290]
pp. 76–77, fn. 32	anuprāsa には・・・と合致する	(削除)
p. 79, l. 17	素早く〔体内を〕上下して動き回り、 ・・・見て	上下して動き回る特徴をもち、・・・忽ち 目にして
—, l. 23	peṣayitvā	piṣayitvā
p. 80, fn. 3)	PRZYLSKI [1923: 285]	PRZYLUSKI [1923: 285]
p. 81, fn. 40	LÉVI 説	LÉVI 説
p. 82, fn. 6)	PRZYLSKI [1923: 290]	PRZYLUSKI [1923: 290]
p. 83, l. 17	PRZYLSKI [1923: 98–105]	PRZYLUSKI [1923: 98–105]
p. 86, l. 12	<i>ante correctum</i>	<i>ante correctionem</i>
—, —	<i>post correctum</i>	<i>post correctionem</i>
p. 90, l. 7ff.	Tibetan translates	Tibetan has
p. 96, l. 8	驕りの粉碎	憾みの粉碎
—, fn. 15	尊大な女の驕り	尊大な女の憾み
p. 99, l. 33	実母のように	私の実母のように
p. 100, l. 13	不意に	(削除)
—, l. 14	その心は	〔その心は〕
—, fn. 23	その心は	〔その心は〕
p. 102, l. 26	navābhilāṣātiśayonmukhāni	navābhilāṣātiśayonmukhāni
—, ll. 35–36	欲望の対象を求める心を抱くものです。 〔そしてその女の〕	欲望の対象に興味を抱く心を抱くもので あり、〔その〕
p. 104, l. 1	針のように耳を裂く不快な	針のような耳を裂くその不快な
p. 110, l. 1	はっきりと目にしたことが	はっきりと確かに目にした
p. 113, l. 27	〔クナーラに〕	彼に
p. 117, l. 15	〔愛しい男との別離を〕恐れている	〔愛しい男との別離の〕苦しみを恐れて いる
—, l. 16	〔彼は〕	彼は
p. 118, l. 27	諸々の王権など	王権など
p. 119, l. 20	諍い付随する	諍いに付随する
p. 121, l. 2	鏡に映し出された	鏡に映し出されたかのような
p. 122, l. 6	病の恢復をもたらす	(削除)
p. 123, l. 6	後悔の	(削除)
p. 124, l. 24	素早く〔体内を〕上下して動き回り、 ・・・見て	上下して動き回る特徴をもち、・・・忽ち 目にして
p. 126, fn. 48	ラグナ	ラシュナ
p. 128, l. 3	ABE <sup>pc</sup> DZ (Ed.);	BE <sup>pc</sup> DZ (Ed.);
p. 129, ll. 4–5	一族の獅子である	一族という森にいる獅子である
—, l. 9	邪悪さに見合った美しい容姿を備え、 若く、堅忍不拔で、勇猛である。	その美しい容姿と若さ、堅忍不拔、勇猛 は邪悪さに見合っている。
—, l. 11	以上の私の要求〔を満たすこと〕 を所望する次第である。	以上が私の要求であり、願いである。
p. 131, l. 23	怒りの熱を	怒りの火の熱を

p. 136, l. 3 —, l. 4 p. 138, ll. 10–11 p. 142, ll. 12–13	[Z382a1] padacyutānām viṣameṣu pumsām nāsty eva jāyāsadrśaḥ sahāyaḥ 有徳者を 〔そして彼女は〕	[Z382a1] padacyutānām viṣameṣu pumsām nāsty eva jāyāsadrśaḥ sahāyaḥ 有徳者の集団を 〔そんな顔を目にして彼女は〕 悲しみに 屈せられ
p. 144, l. 2 —, l. 24 p. 145, l. 25 p. 146, fn. 71	sudhāṃśuryaśaseva 若々しさを失って行っている時 〔彼は〕 「横柄な〔喋り声に〕 悩まされ」	sudhāṃśur yaśaseva 若々しさを徐々に失って行っている時 彼は 「正しい判断の出来ない状態で発する 言葉で悩ませたので」
p. 147, l. 31 p. 148, l. 30 p. 152, l. 31	苦しみという激しい苦しみで 幸福の終わらせる 蓮池から〔なくなってしまう〕ように、	痛みという激しい苦しみで 幸福を終わらせる 蓮池から輝かしい美しさが〔なくなっ てしまう〕ように、
p. 153, fn. 80 p. 154, ll. 31–33	愛らしさを備えた唇を 運命というものは、卑しき者であれ、 ・・・これが〔運命というものの〕本質 なのです	創り出す者にとっても愛らしい唇を 卑しき者であれ、・・・これが運命という ものの本質なのです
p. 156, l. 10 p. 157, l. 12	凄惨な出来事を 彼がその残忍で酷い悪行に対して報復 しようとするのを	その凄惨な出来事を やり口が残忍であり、酷いその悪行に 対して彼が報復しようとするのを
p. 164, fn. 94 p. 165, l. 23 —, l. 25	Vandenhöck Heinlich pp. 299–308	Vandenhoeck Heinrich pp. 299–307

#### 略号及び参考文献

- BAREAU, André 1979** “CR. de Eugène DENIS, *La Lokapaññatti et les idées cosmologiques du bouddhisme ancien*,” *BEFEO* 66, pp. 299–301.
- BONGARD-LEVIN, Grigorii Maksimovich & VOLKOVA, O. F. 1963, 1965** “The Kuṅāla Legend and an Unpublished Aśokāvadānamālā Manuscript,” *Indian Studies Past & Present* 5–6, pp. 113–132, 315–318, 67–70, 309–319.
- DE JONG, Jan Willem 1980** “CR. de Eugène DENIS, *La Lokapaññatti et les idées cosmologiques du bouddhisme ancien*,” *IJ* 22, pp. 70–73.
- DENIS, Eugène 1976** “La Lokapaññatti et la légende birmane d’Aśoka” *JA* 264, pp. 97–116.  
— **1977** *La Lokapaññatti et les idées cosmologiques du bouddhisme ancien*. Paris: Librairie Honoré Champion.
- DUROISELLE, Charles. 1904** “Upagutta et Māra” *BEFEO* 4, pp. 414–428.
- HAHN, Michael 1982** “Kumārālātas Kalpanāmaṇḍitikā Drṣṭāntapañkti: Nr. 1 Die Vorzüglichkeit des Buddha,” *ZAS* 16, pp. 309–336.
- HANISCH, Albrecht 2007** “New Evidence of Aśvaghōṣa’s *Sūtrālamkāra*: Quotations from the *mDo sde rgyan* of gZan la phan pa’i dbyaṅs in the Tibetan Version of Dharmakīrti’s *Jātakamālāṭīkā*,” in *Indica et Tibetica: Festschrift für Michael Hahn hrsg. von Konrad Klaus und Jens-Uwe Hartmann*. Wien: Arbeitskreis für tibetische und buddhistische Studien, pp. 193–205.
- HUBER, Edouard 1904** “Études de littérature bouddhique,” *BEFEO* 4, pp. 698–726.
- KalpM** See LÜDERS [1926].
- Loka-p** See DENIS [1977].
- LÜDERS, Heinrich 1926** *Bruchstücke der Kalpanāmaṇḍitikā des Kumārālāta* (= Kleinere Sanskrit-Texte Heft II). Leipzig: Deutsche Morgenländische Gesellschaft. (Nachdr. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, 1979)
- MCDERMOTT, James Paul 1985** “Rev. of J. S. Strong, *The Legend of King Aśoka*,” *JAOS* 105-1, pp. 179–180.
- METTE, Adelheid 1985** “Zur tibetsichen Überlieferung der Aśokalegende,” *ZDMG* suppl. Bd. 6, pp. 299–307.
- MUS, Paul 1939** *La Lumière sur les Six Voies* (=Travaux et mémoires de l’institut d’ethnologie 35). Paris: Institut d’ethnologie.
- OKANO, Kiyoshi (岡野 潔) 1998** 「インド正量部のコスモロジー文献、立世阿毘曇論」(『中央学術研究所紀要』27, pp. 55–91)

ウバグプタのマーラ調伏物語 (山崎)

- PRZYLUSKI, Jean 1923** *La légende de l'empereur Açoka (Açoka-Avadāna): Dans les textes indiens et chinois.* Paris: Paul Geuthner.
- STRONG, John S. 1983** *The Legend of King Aśoka: A Study and Translation of the Aśokāvadāna* (=Princeton Library of Asian Translations). Princeton: Princeton University Press.
- **1992** *The Legend and Cult of Upagupta: Sanskrit Buddhism in North India and Southeast Asia.* Princeton: Princeton University Press.

(やまさき かずほ, 広島大学大学院 [インド哲学])